

「今後の県立高校に関する地域検討会議（第2回）」記録要旨【胆江ブロック】

平成27年7月24日（金）

奥州市役所江刺総合支所 4階大会議室

【小沢 奥州市長】

- ・統合によって新しい教育体制の作成のために、メリット、デメリットを検討するのか、現状の高校を維持するために課題解決を図る方法を検討するのか、明確化するべきではないか。
- ・島根県の事例のように展開するのは私立高校では可能かもしれないが、県立高校においては難しいと思う。
- ・小規模校では、全てを満足する高校ではなく、特長的な教育を提供できる高校を目指す方法もあるのではないか。例えば、様々な学系のある不来方高校や中高一貫教育の一関一高はその高校の在り方を明確に示している。
- ・胆江ブロックには普通科が3校、農業、工業、商業の専門高校、私立高校があり、非常にバランスの取れたエリアで高校の選択肢を減らすべきではない。
- ・商業、工業、農業高校は全国的に見てもレベルの高い実績を残している。その専門高校の生徒の多くが地元就職を希望しているということも考慮して再編しなければならない。
- ・岩手県の高校の大学進学における全国的な位置付けは低いと感じている。普通科高校ではもっと大学進学に特化した形も作っていかなければならない。
- ・現状を維持することで高校が小規模化することによって、デメリットとなる科目選択や部活動の開設等について検討しながら、県としては財政をどのように捻出していくかということ論議していく方が、未来に向かって人を育てるという観点から夢のある話になるのではないか。

【県教委】

- ・県教委としても統合はなるべく避けたいところであるが、生徒減少が進む中では統合も選択肢として考えていかなければならない。方向性を明確にしなければならないところはあると思うが、皆さんからの意見をいただいたうえで、具体的な再編計画を策定していきたいと考えている。
- ・高校はある一定の規模があることが望ましいが、通学等の影響を考えると一概に統合はできないので、小規模校の存続についても考えていかなければならない。小規模校として存続した場合の課題を少なくするために、小規模校の魅力づくりをどのようにしたら良いかという観点で意見交換をしたい。
- ・胆江地区には大学進学や就職等に対応する学校、技術を学ぶ専門高校、高校に入学してから進路を考えていく総合学科高校等、様々な高校があり選択肢はなるべく残していきたいと考えている。この5年間は現状維持できるかもしれないが、その後の生徒減少への対応も踏まえて再編計画の策定をしていきたい。

【高橋 金ヶ崎町長】

- ・第1回の地域検討会議の意見を整理し、それに対しての県教委の考えや方向性を示し、それを基に論議しなければ、意見の積み重ねが無く、議論が深まらないのではないか。
- ・魅力ある高校をつくるというのは海士町のような連携を県教委は期待しているのか。
- ・胆江ブロックから他ブロックへ100人程流出しているが、それは交通の便が良いのが原因の一つである。ブロック毎に考えると流出となるが別の見方もあるのではないか。ブロック制に関する考え方をどうするのかという課題もある。

（次頁に続く）

- ・小規模校を存続させた場合の教員配置について等、具体論で論議しなければならない部分と、何年後か先を見据えたロードマップ的な整理をしながらビジョンとして論議しなければならない部分とを2つに分けて検討すべきではないか。

【県教委】

- ・県教委としては他県の事例をそのまま各市町村でやってほしいという趣旨で紹介しているわけではない。海士町のように産業振興も含めた幅広い形での取組もあるとの紹介である。県内においても、このような趣旨を生かしながら、県立高校ではあるが市町村や地域の方々と協力することによって学校をより良くしていけるのではないかと考えている。
- ・学校、学科の配置に関してはロードマップ的な形のもの、ビジョンとしての形のもの、ミクロとマクロでの両面の見方は当然必要だと思っているが、資料として一緒に示したことによってわかりにくい面があったと思うので修正しながら対応していきたい。

【高橋 金ヶ崎町長】

- ・前回の意見で金ヶ崎町は英語教育を通して金ヶ崎高校と連携したいと提案したところ、高校側もその気持ちがあるとのことであった。英語教員の配置については配慮されているのはわかるが、具体的な取り組みやビジョンを示しながら県教委、高校、町が一体性を持って取り組んでいかなければならない。
- ・具体的な取り組みが結果的に魅力につながり、特長ある高校になるのではないか。胆江ブロックには普通高校が3校あるが、どのような特長ある高校を作るかということ市町村に求めるのではなく、県教委が今までやってきた歴史等も踏まえながら考えを示すことで、市町村との連携が一層明確になり、議論が進むのではないか。

【県教委】

- ・前回、金ヶ崎町からは小中学校、幼稚園も含めて、英語教育に力を入れているので高校教育で連携ができないかというアイデアをいただいた。そのような様々な考えをこれから具体的に検討していきながら、高校の魅力づくりにも取り組んでいく必要がある。
- ・県立高校の場合は、魅力ある学校づくりとして進学関係の支援、キャリア教育等を行っているが学校単独で取り組むには限界があり、私立高校のように特色として打ち出すには難しい部分がある。市町村や地域の方にアイデアを含め、協力いただくことで、学校の魅力づくりにつなげていけないか、一緒に考えていけないかという趣旨であると理解いただきたい。

【高橋 金ヶ崎町長】

- ・具体的に各高校における特長を県教委として位置付けをしなければ、運営する学校側が苦勞するのではないか。
- ・県立高校は県下一律同じではなく、それぞれの高校の特長をしっかりと示し、地域性、地域の文化等、様々な課題に関して互いに認識を共有化し、課題解決に取り組むようにしなければ、目標や着地点が決まらず思うように議論が進まないのではないか。

【田面木 奥州市教育委員会教育長】

- ・生徒は何を基準に進路を選択しているか考える必要があるのではないか。
- ・生徒数が多かった時代はある意味でどの高校も平均的な学校で良かったかもしれないが、少子化が進む中、学校を特化していった方がよいのではないか。生徒数が減少してきている中、高校を特化し、その特長ある学校へ通う生徒に対する援助を考えてもいいのではないか。
- ・高校を特化していった場合、部活をやりたいからこの学校、医者になりたいからこういう学校というように生徒が自分で選択できることが大事になってくると思う。 (次頁に続く)

- ・海士町の例が示されたが、同じように山形県の中学校で山村留学に取り組んだ例がある。様々な取組について結果を検証し、どう生かすかということも含めて考えていかなければならない。

【県教委】

- ・岩手県の高校の目指すものは知・徳・体のバランスの取れた人間形成である。社会で活躍していけるように資質、能力を育てて社会に送りだしたい。一人ひとりの目標を達成するための力をつけることが公教育に求められていると考えている。
- ・教育の機会の保障と教育の質の保証をどのようにして両立させながら、生徒一人ひとりの人間形成をしていくかが重要である。そのうえでの個性づくりとして進学に特化する等、それぞれの生徒の進路希望に応えることができるようにすることが大事だと思っている。
- ・以前と比較し、地域と連携した学校の特色づくりはかなり進んでいる。普通科では、金ケ崎高校は英語教育に力を入れ、大野高校は里山整備等で個性づくりに取り組んでいる。高校の情報発信力が弱く、広く県民に理解いただけていないところがあるので今後、更に発信していく必要がある。
- ・各高校では中学生に対し、中学校に出向いて学校の特色について説明をしているが、まだ不十分な点があり、地域との連携を更に進め、特色づくり、特長を理解していただく取り組みが必要だと考えている。
- ・高校の魅力づくりでは、特化することも大事であるが、地理的にその高校にしか進学できない生徒のニーズにも応えなければならぬし、様々な特色を持った生徒のニーズにも応えなければならぬので、私立高校とは異なり、幅広くニーズに応える部分と、個性を目指していく部分のバランスを考えなければならない。
- ・少子化を迎え、高校入試の倍率は1.0以下で、どんなに各高校が特色づくり、個性を出しても定員を充足できない現実がある。
- ・高校の配置については大きく分けると方向性は2つある。一つは全部の高校を平等に小さくしていく方法と、1学級校も7学級校も残し、学校数で調整してバランスを取っていく方法である。各地域で置かれている課題が異なり、一つの答えを出すことはできないと思うので、各地域の課題を踏まえてどの方法が良いのか具体的な意見をお願いしたい。
- ・葛巻町で山村留学という制度を創設した際に、県教委として現状の入試制度では学区外扱いとなり受け入れが難しくなるため、入試制度の解釈を工夫し、受け入れやすくした。市町村の取組に入試制度が妨げにならないように等、県教委としても様々改善に取り組んでいることを御理解いただきたい。

【小沢 奥州市長】

- ・胆江ブロックとしては各高校の特色を全面に出し、難しいかもしれないができるだけ高校を維持しブロック外に住む生徒にとっても選択可能な、色々な高校がある地域として進みたい。
- ・生徒数が減り、現状維持できないというのは本当なのか。財政があれば可能ではないか。

【県教委】

- ・生徒減少のために高校を維持していくのが難しいのは財政面の問題だけではなく、部活動では団体種目が組みにくくなる等、生徒の学ぶ環境への影響もある。そのため生徒減少に対応して学校規模の調整を行っていかねばならないと考えている。
- ・生徒減少は各地域によってその減り方が異なるため、それぞれのブロック毎に検討していかなければならないと考えている。財政面だけを考えて再編計画を進めているのではなく、少子化の中で子ども達の学ぶ環境をどのように維持、確保していったらよいのかということを考えて進めていることを理解いただきたい。
(次頁に続く)

【小沢 奥州市長】

- ・少子化、財政の問題があるからということだけではなく、教育に関しては理想を求め、その理想に到達するための課題がどこなのかというところを考えていかなければならないのではないかと思う。現実を分析し、我々大人が知恵を働かせて子ども達に素晴らしい教育の環境を残せるのかということ議論していかなければならない。

【佐藤 奥州市PTA連合会会長】

- ・様々な進路希望に対応できるように、大学進学に対応する普通高校や職業教育を行う専門高校をできるだけ維持して中学生の進路選択の幅の確保をお願いしたい。
- ・社会で必要とされる基本的知識や技能、それを活用して課題を解決する力等を身につけさせるために、学校の役割に応じた特色ある教育活動を充実させるとともに、胆江地区の発展のために更に教育環境の整備を進めていただきたい。
- ・今後の更に少子化になった場合でも生徒の学科選択の幅を確保するためには、異なる専門高校を統合し、様々な学科を設けた高校の設置についても検討が必要ではないかと思っている。

【菊池 奥州市PTA連合会副会長】

- ・高校の選択肢は減らさないで欲しいというのが、生徒、保護者の意見であると思う。
- ・今の子ども達は勉強や部活動に対し、シビアな考えを持っている。例えば、しっかり活動し、強い部活がある学校は選択するが、人数が少なく、更に縮小していく部活動のある学校は選択しない。
- ・それぞれの高校の特長をしっかりと中学生にPRし、ブロック外からも生徒が入学するようにしていくことが何よりも先なのではないか。例えば、岩谷堂高校はウエイトリフティングが強いが、他の地域の人々にはあまり知られていない。奥州市や胆江地区として各高校の特色を活かすPRをしていけないか。中学生は自分の行こうとしている高校については詳しく知っているが、それ以外の高校のことは全く分からないことが多い。

【高橋 金ヶ崎町長】

- ・農業、商業、工業高校のどれか一つでも無くなることは胆江地区として致命傷になるので、高校存続を前提にしてほしい。小規模でも維持できる体制づくりに対して県教委としての考えを示し、財政的、人材的な面で市町の協力体制をどのようにするかという観点で議論しなければ繰り返しになるのではないかと。
- ・奥州市、金ヶ崎町には工業団地があるが、岩手県はものづくりで産業振興を進めている中、働く場所も増えてきて有効求人倍率も良くなってきている。行政側と産業側が協力しながら職場の確保を進めている中で、子ども達の高校の選択の幅を減らすことはできない。
- ・子ども達が将来、職業人、社会人としてやっていくためには、小中学校でのキャリア教育の充実を図り、子ども達がしっかり考えながら高校を選択できるようにしていかなければならない。
- ・地域の支援、協力や連携を望むのであれば、市町、高校、中学校を入れた協議会を立ち上げ、これからの在り方、進め方を検討し、中学校の進路指導や情報伝達の方法も含め、今後の方向性を早い時期に出さないと課題解決にならないのではないかと。

【田面木 奥州市教育委員会教育長】

- ・主体的な学習や基本的な内容についてはどの高校でも取り組みながら、ある部分では学校を特化しななければいけないのではないかと。そして小中学校では将来をしっかりと考え、高校を選択できる力を身につけさせていかなければならないが、高校があまりに小規模になりすぎると中学生の進路選択のネックになってしまう。

(次頁に続く)

- ・あまりに小規模になっていくと部活動ができなくなってしまう。中学校でも少子化の影響で部活動ができなくなってきた。中学生は部活動ができないために転校する場合もある。そのようなことは高校でも考えられ、本当はその高校に行きたいのだが、部活動が無いために諦めてしまう場合もあるのではないか。そのため統合ということも考えていかなければならないのではないか。
- ・地域の特色や産業を残していかなければならない。小中高校が一体となりキャリア教育を含めた教育の充実を図り、生徒が自分で判断できる力をつけていくことが将来の産業、地域づくりにつながっていくと思う。
- ・特に岩手県の小中学校は小規模になってきており、平均すると1学級30人ぐらいになっている。高校再編では地域や産業のことを考慮し、教員定数の確保や1学級定員を減らすことも考えていかなければならない。

【県教委】

- ・教員定数に関しては県教委として国へ基準見直しの働き掛けを行っているが、国では直ちに対応していただける状況ではないが、引き続き要望していきたい。
- ・東北では生徒減少が特に進んでおり、本県と同様の状況にあり、青森、秋田、福島等の状況も踏まえて検討していきたい。平成20年から26年までの間で生徒数は13%の減少であるのに対し、教員数は9%台の減少であり、できるだけ教員数の減少を抑えている。高校における一人あたりの教育費は全国2位(文科省調査)となっており、県としても努力しているがPRが足りない部分がある。
- ・ものづくりや地域産業に対する御意見や地域との連携を協議するための組織の提案等、貴重な御意見をいただきありがたい。
- ・近年の志望の動向をみると工業系の専門学科の志願者が減少し、普通科系を選択する傾向がある。出口のことを考えると地域の産業界の方にも御理解いただき、小中学校の段階からキャリア教育に力を入れていく必要があり、今後工夫していきたい。

【千葉 金ヶ崎町農林水産関係者代表】

- ・今までの高校は大学受験のための学校というイメージが強かった。学力アップばかり考え、バランスの取れた人間形成をしてこなかったことが、このような少子化現象を生む原因になったのではないかと。
- ・産業というのは生活そのものであり、専門教育は非常に大事であると思う。学力のレベルアップが大事なのか、子ども達がいきいきすることが大事なのか。これからの時代を担う子ども達のために人口増加につながるような教育をしていくことが大切ではないかと考えている。
- ・胆江地区には芸術とスポーツの分野の学科が無い。子ども達がいきいきとし、調和の取れた人間形成をしていくうえではこの分野は非常に大事ではないか。スポーツをしたいのであればスポーツの学科をつくり、子ども達がいきいきとした環境をつくるということの方が学力アップよりは大事ではないかと考える。
- ・大学進学希望の生徒に対しての手厚い進学指導も必要だと思う。そこは必要最低限の学級数で学力向上に努め、首都圏でも活躍できるようなエキスパートを育て、やがては岩手県に還元してくれる、岩手県のために役立つような人材育成を目指してほしい。
- ・岩手県は自然にも恵まれ、この胆江地区は交通の便が非常に良く、子どもが育つ環境として良いと思うので胆江地区の活用の仕方はこれから開けてくるのではないかと考えている。

(次頁に続く)

【菅原 金ヶ崎中学校PTA副会長】

- ・高校再編の議論において部活動が重要視されているが、高校では勉強が一番重要ではないか。中学生が部活動のために高校を選択するというのには疑問がある。外国にも恥じない、日本人としての基礎基本をしっかり学ぶ教育をしていかなければならないと感じている。
- ・胆江ブロックは高校の選択の幅が広いと感じている。普通高校は3校あるので、それぞれの特長がもっとあってもよいのではないか。
- ・金ヶ崎町ではスポーツ面に盛んに取り組んでいるが、芸術面が弱いと感じている。金ヶ崎中学校には文化部が3つしかない。部活動の指導ができる教員がいないのであれば、地域の方々に協力していただけないのか。金ヶ崎町では生涯教育にも積極的に取り組んでおり、部活動を生涯教育の一環と考えていただけないか。
- ・部活動は学校教育の一環なのか。いきいきとして学ぶということを考えると放課後に趣味や自分がやりたいことを地域と連携して活動することもあってもいいのではないか。部活動ができなくなるから高校を統合するということがないようにしてほしい。

【県教委】

- ・高校が大学進学しか考えていないというイメージが伝わっているとしたら、高校の情報発信の弱さがあるのではないかと思う。決してそのようなことはなく、就職希望の生徒も大切に育てており、大学へ進学することに価値があるというような指導はしていない。誤解のないように発信していきたい。
- ・生徒がいきいきとするには学力の保障も大事である。一定の学力は社会に出てからの生活の質に直結しているので、自分で働き、生活していけるような力を学力と考え、生徒に身につけさせたいと考えている。
- ・部活動については、人間形成の面で学習指導要領上でも部活動の重要性をうたっており、県としても取り組んでいる。学生の本分は学業であり、勉強してからの部活動である。欠点科目があったら大会に出場できない等規定を設けて学校では運用しているので、部活動重視ではないということを理解いただきたい。
- ・地域との連携として体育協会等から、コーチとして指導をいただく機会が以前と比較して増えてきている。指導者には十分な報酬をお支払いすることができないが、献身的に指導していただいている。
- ・人間性を育てる意味でも勉強、部活動、生徒会活動、地域の活動は学校教育の活動の中で必要である。
- ・学科の配置として貴重な意見をいただいたが、芸術とスポーツに関する学科の配置に関しては広域的に捉え、県全体でバランスを考えなければならない。芸術やスポーツは一定程度の学校規模による切磋琢磨する環境がないと向上が難しく、ある程度の広域性の中で配置する必要がある。

【高森 奥州商工会議所事務局長】

- ・胆江ブロックは商業、農業、工業高校があり、生徒が様々な高校を選択でき、恵まれた地域であると思っている。
- ・生徒数の減少から、このままいくと高校は小規模化していくと思うが小規模校にはデメリットもあると思うが、メリットの方が大きいような気がする。
- ・小規模校は部活動や開設科目においてデメリットの面があるが、中学生が高校を選択する際にはそのようなデメリットもあることを踏まえながら選択させてもいいのではないか。

(次頁に続く)

- ・大学進学については国立大学を目指す高校、私立大学を目指す高校等、高校によって開設科目を変えることで特長を出し、選択させることも高校の選択幅のある胆江地区では可能ではないか。

【佐々木 胆江地区中学校長会会長】（奥州市立南都田中学校長）

- ・小規模になってもできるだけ高校を存続させる方向で考えていると理解している。その視点から選択肢の一つとして、校舎制というのがあることを今回初めて知った。しかし、実際に校舎制にするには統合と同じくらいの苦労があるだろうと思った。
- ・小規模校のデメリットを解消する一つの策として、大学や大手の塾では一般化している遠隔授業というものを県立高校でも採用できないものか。制度的に難しい部分もあるかもしれないが、少しでも活用できれば、専門の教員がいない学校でも授業を受けることが可能になるのではないか。
- ・教育の機会の保障と質の保証のバランスをどこに見出すかということであるが、実質的にはそうかも知れないが、本来は教育行政というのは両方ともレベルの高いところを目指すべきではないか。どちらを取るかではなく、どちらも目指すという姿勢を持ち続けていただきたい。

【県教委】

- ・文科省では平成27年4月から双方向通信による遠隔授業を可能にするように法律改正した。文科省が示したガイドラインには教育の質を保証するために幾つかの要件がある。その要件の中に教員、生徒の両方でやり取りできる双方向性の確保がある。塾や大学では双方向性の必要はなく、一方通行でよいと普及しているところもある。高校や中学校では協調性が求められており、協調的な学習を進めるうえでも双方向性は確保されなければならない。また、遠隔地の授業者が生徒の評価をしなければならないというような要件もあり、それらの要件をクリアするためにどうしたらよいか今検討しているところである。予算化も考えており、実行可能なところからの取組みを予定しているので御理解いただきたい。